「死は我々の生をロマン化する原理である」

――ノヴァーリスの一七九七年の日記・書簡と「ロマン化」の詩学

田中　均

はじめに

本稿は、ドイツ初期ロマン主義の代表的な詩人であり理論家であったノヴァーリス（Novalis 本名フリードリヒ・フォン・ハルデンベルク Friedrich von Hardenberg 1772-1801）[1] の思想において死と芸術創造がいかなる相関関係を持っていたかを解明し、それを通じて死生学に美学史研究という観点から寄与する試みである。

死生学における美学的および美学史的な研究は、管見の限りほとんど未開拓の分野ではないかと思われる。確かに死生学において「生と死の形象」の分析には枢要な地位が与えられており、とりわけ、死が芸術作品においていかに形象化されてきたかの歴史と現状については、これまでに着々と知見が蓄積されてきたし、今後も活発に研究が展開されることが予測される。[2] しかしその反面、死を形象化するという行為自体についてメタレヴェルから考察することには、これまであまり注意が払われなかったのではないか。そもそも芸術創造という営為は死という現象とどのように関係づけられてきたかということの歴史と現状についての思想史的・哲学的考察は、未だ深められていない課題であると思われる。この課題に取り組むことこそ、今後美学的および美学史的研究が死生学になしうる最も重要な寄与の一つであろう。それゆえに本稿は、西洋近代美学の成立期を対象とする美学史

的事例研究として、死と芸術創造との関係という問題に取り組むものである。

本稿の考察が導きの糸とするのは、ノヴァーリスが一七九九年に書いたと推定される遺稿断片に現れる、「死は我々の生をロマン化する原理である」(Der Tod ist das romantisirende Princip unsers Lebens; III 750 xxx)[3] という表現である。

「ロマン化」については第三節で詳述するが、議論を先取りして述べると、ノヴァーリスにおいて「ロマン化する」(romantisiren) とは、日常的で見慣れた事物に謎めいて神秘的な表現を与えることを指している。これとは逆に、神秘的なものによく知られた表現を与えることは「対数化する」(logarythmisiren) ことと呼ばれており、[4]「ロマン化」と「対数化」は一般に彼の詩学理論を代表する概念対とみなされている。[5] それゆえに、引用した断片を手掛かりとすることで、彼の思想において死と芸術創造がどのように関係づけられているかを明らかにできると考えられるのである。

「死は我々の生をロマン化する原理である」という表現を解釈する上で本稿がとりわけ重視するのは、ノヴァーリスが一七九七年三月から七月にかけて書いた日記と書簡である。なぜなら、それらのテクストには彼が近親者の死をどのように経験したかが詳細に記録されているからである。彼は一七九四年に当時一二歳の少女ゾフィー・フォン・キューン (Sophie von Kühn) と知り合い、翌年に婚約したが、彼女はその年の末に重病にかかり、九七年三月一九日に死去した。また四月一四日にはノヴァーリスの弟エラスムスも病死した。そのため、九七年三月からの数ヶ月間の日記や書簡には、二人の死、とりわけゾフィーの死についての省察が多く書き残されている。

しかし、ノヴァーリスの日記と書簡に注目するという本稿の立場に対しては、個人的体験と理論的省察とは厳密に区別されるべきではないかという反論があり得るだろう。確かに、ノヴァーリスの詩作と思索を、彼の実体験に還元して解釈することは偏狭な態度として批判されねばならない。しかし、ノヴァーリスの芸術創作論がゾフィーの死という彼の個人的体験とどのような関係を持っているのかについて考察する必然性は充分ある。とい

うのも、彼は九七年の日記や書簡において、ゾフィーという近親者の死をただ記述しているのではなく、彼が彼女の死にいかなる意味を与え、また死者との関係において彼自身の生にどのような意味を与えたのか、さらに、彼がどのような仕方で死者と関わろうとしたのかを記している。これらの省察は単なる体験の記述ではなく、既に自己反省的な考察と言うべきであり、理論的内容の遺稿断片と密接な関係を持つものとして解釈すべきである。[6] 本稿では以下第一節と第二節で主として九七年の日記と書簡を分析し、第三節ではそれを踏まえて理論的内容の遺稿断片について検討する。

一　一七九七年四月から七月の日記――「使徒の地位」への「決意」

既に触れたように、一七九七年三月一九日にゾフィー・フォン・キューンは死去した。その約一ヶ月後の四月一八日から七月六日までノヴァリースがつけた日記が遺されている[7]が、その形式は独特なものである。例えば、日記が最初に書かれた四月一八日の項目を見てみると[8]、「四月一八日」という日付の後に「三一」という数字がつけられており、これはゾフィーが亡くなってからの日数を表している。日付の後にゾフィーの没後の日数を書き添えるという形式は、七月まで継続されている。そのことは、ノヴァーリスがこの日記において自分の生きる時間をゾフィーとの関係によって規定しており、日記を書く行為がゾフィーへの追憶の行為であったことを示している。しかしこの日記には、亡くなった恋人への追憶にふける詩人というイメージからはかなりかけ離れた記述が現れる。例えば、四月一八日には「早朝に性的な興奮」を感じ、午後には知人と「陽気におしゃべり」して歌と楽器の演奏を楽しんだと書かれている。日付の後の数字によって日記をゾフィーという死者との関係によって規定しながらも、その内容としては、雑多で見方によっては卑俗な日常生活を記述するというこのギャップをどう考えればよいのだろうか。このようなギャップを内包した日記を書くことは、ノヴァーリスにとっていかなる意味を持っていたのか。

このことを理解するための鍵となるのが、九七年の日記に頻繁に現れる「決意」(Entschluß) という言葉である。

日記では類似の語彙として「目標についての考え」(Zielgedanke)、「意図」(Vorsätze) といった言葉も用いられており、それらの具体的な内容についてノヴァーリス研究では一般的に、ゾフィーの後を追って自殺することと理解されている。たしかにノヴァーリスは日記において自分自身の死にしばしば言及しており、このことと「決意」という表現が密接に関係していることは明らかである。しかし日記を読む限り、この「決意」が、恋人を失った悲嘆のあまりの自殺志向であるとは考えにくい。というのも、そこでは「決意」という言葉に「男らしい」(männlich) とか、「勇気を持った」(muthig) といった形容詞がしばしば添えられているからである。

たしかにゾフィーが亡くなる直前のノヴァーリスは、全くの絶望に陥っていたようであり、彼は三月一四日に友人フリードリヒ・シュレーゲルに宛てた書簡で「生への嫌悪」(der Lebensüberdruß) を吐露している (I 618)。それは具体的には思考の混乱、学問への意欲の低下、さらに活動一般についての無気力であるが、こうした否定的感情は、日記に頻出する「勇気を持った」「男らしい」決意という表現とは異質である。これらの二つの感情はどのような関係にあるのだろうか。この点を理解する上で参考になるのは、三月二四日にノヴァーリスから知人カロリーネ・ユストに宛てた書簡である。[9] この書簡でノヴァーリスは、自分が内心に抱いているゾフィーのイメージが、自分にとって心の導き手となると述べている (I 624)。というのも、死によって俗世の「悪しきもの」や「不正なもの」から解き放たれたゾフィーのイメージは、ノヴァーリスにとって「よりよい自己」、「模範」となるからである。このようにノヴァーリスは死者を理想化してそれと同一化しようとしており、さらには、自分もまた「死んでいるようなもの」であると述べる。

> 死者たちの周りには永遠の平安の霊 (Geist) がみなぎっており、調和、愛、良き心、穏やかさ、謙譲のこの霊がまた私の周りにもみなぎるべきです。というのも、私が死者になるのに何か欠けているでしょうか——私は死んでいるようなものではないでしょうか。 (ebd.)

一見するとこの記述は、三月一四日付のシュレーゲル宛書簡と同じく「生への嫌悪」の吐露であるかと思えるが、この引用に続く箇所を見ると、ノヴァーリスは死者と同一化しようとすることによって生への強い意志を得たことが理解される。

これを書いている間私がとても強く思ったのは、私の悲嘆は利己的で卑小で偏狭なものではないかということです。私が本当に高次の人間であろうとするなら、今永遠の快活が私の目と額に生気を吹き込み――そして天上的な熱狂が私の胸を満たすはずではないでしょうか。このように現世的に嘆いている私とは何者でしょうか。永遠への使命を私にこれほど早く告知されたということについて、私は神に感謝すべきではないでしょうか。それは使徒の地位への使命（Beruf zur apostolischen Würde）ではないでしょうか。私はゾフィーの運命を本気で嘆くことができるでしょうか――それは彼女にとって特権ではないでしょうか――彼女の死とその後を追う私の死（Ihr Tod und mein Nachsterben）はより高次の意味における婚約ではないでしょうか。神は私と彼女を、忍び寄って感染する卑俗さから守ろうとされたのです――神は彼女をより高い教育施設へともたらそうとされ、この繊細な花はよりよい天のもとに植え替えて、より強く粗野な男である私はまだ地表の空気の中で成熟させようとされたのです。

（I 624f.）

この引用でノヴァーリスは、ゾフィーの死についての「悲嘆」は「利己的で卑小で偏狭」であり、むしろ自分は今「永遠の快活」と「天上的な熱狂」を感じるべきであると述べている。なぜなら彼によれば、ゾフィーが死によって「卑俗さ」から守られ「よりよい天のもとに植え替え」られたことは彼女の「特権」であって、彼女の死を通じてノヴァーリスの現在の生にも新たな意味づけがなされるからである。死によって高められたゾフィーに対して、「より強く粗野な男である私」には此岸の「地表の空気」の中で自己を形成することが求められている、と彼は理解する（彼は生と死の二分法を、「強い」男性と「繊細な」女性の二分法に重ね合わせているわけである）。

そして此岸に生きながらゾフィーを「模範」としていわば死者のように生きることは、ノヴァーリスによれば「使徒の地位」を占めることである。なぜなら、彼は此岸にいながら彼岸の永遠性を信仰し、その永遠性について生者に広め知らせる使命を担っているからである。

この書簡をからは、ノヴァーリスの死への「決意」が、一般的な意味での自殺願望とは相当異なることが分かる。「決意」は日常生活への埋没と対立するだけでなく「卑小」な「悲嘆」とも一線を画す。たしかに「彼女の死とそれに続く私の死」は「より高次の意味での婚約」とされるが、ゾフィーの後を追って実際に自殺することは目指されていない。ノヴァーリスは、本当に命が絶えるまで生者と死者の媒介者としての生を続けることが「使徒の地位」にある自分の使命であると考えている。このことが彼の「決意」の内実である。

しかしノヴァーリスは、日記の記述から分かるように、その「決意」の通りに生活していたわけではなく、むしろ社交を楽しみ日常性へ埋没しようとする強い傾向を持っていた。日記に書き遺されている彼の生活は、ある時はゾフィーのことを想起しつつある時は友人との社交を楽しみ、そしてそれを日記の中で反省するという、振幅を持った生活であった。[10] 彼の日記は、日常性への埋没にあらがう内心の葛藤の記録と言うべきである。その点を踏まえた上で、ノヴァーリスが日記を書いた理由を考えてみると、彼にとってこの日記は、ゾフィーへの思いと日常性への傾きとの間で振れ動く自己の内心を観察し吟味するための手段という意味を持っていたと推測できる。

日記によって自己の内心を観察し吟味するという行為は、プロテスタント敬虔主義の伝統に即したものとして理解できる。中井章子が言うように、「敬虔主義者は魂のなかでの自己の日々の経験をとおして神を知ることを、『神の実験』とこころえ」、「敬虔主義者は、自己の魂を観察し、内省し、日記に記した」。[11] ノヴァーリスの九七年四月から七月にかけての日記も敬虔主義の「実験宗教学」に連なると理解すべきであろう。

二　想起による死者の現前化と、哲学による擬似的な自殺

ノヴァーリスにとって一七九七年四月から七月までの日記が、自己の内心を観察し吟味する「実験」であった

として、では彼は、生者の世界に留まりながら日常性に埋没することを免れるために、どのような積極的な手段をとったのだろうか。その一つとして、彼がゾフィーの墓を頻繁に訪ねたことが挙げられる。日記によれば、彼女の墓を訪ねるとき、彼はしばしば彼女の姿をはっきりと想起することができた。さらにノヴァーリスは墓を訪ねたとき以外にもゾフィーの姿を想起した体験を繰り返し日記に書き遺し、そうした体験に重きを置いている。これを踏まえると、ノヴァーリスはゾフィーの姿を想起することによって日常性への埋没から逃れようと努めたと考えられる。そして注目すべきは、彼がゾフィーをなるべく具体的な像として想起しようとしていることである[12]。ノヴァーリスにとってゾフィーを想起することは、彼の想像力の積極的な働きによって、現実世界の内に彼女を現前させることであった。

五月一三日にゾフィーの墓を訪ねたノヴァーリスが彼女の姿を幻視した体験（いわゆる「ゾフィー体験」）についての日記の記述が、一八〇〇年に雑誌『アテネーウム』に公刊された「夜の讃歌」において利用されたことは有名であるが[13]、このことについても、ノヴァーリスがゾフィーの姿を偶然受動的に幻視し、後に改めて自覚的・能動的に芸術作品に造形したというよりもむしろ、ゾフィーの姿を幻視した体験自体が、ノヴァーリス自身の想像力による能動的な作用の結果であると考えられる。そもそも彼が墓を訪ねたのは明確な目的に基づいた行動であって、彼はゾフィーの墓という環境に身を置くことによって彼女を想起して現前させ、それによって日常性への埋没から逃れて、生者の世界にありながら死者と内心において同一化しようとしたのである。

また九七年の日記からは、ノヴァーリスが一時期を除いては精力的に文学の研究をしていたことが読み取れる。五月上旬まではゲーテの小説『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』についての批評を執筆するために連日のように研究していたし、下旬からはシェイクスピアの戯曲、主に『ロミオとジュリエット』を研究している。さらに日記が書き遺された時期の少し後、九七年の秋には哲学研究に従事し、カントとオランダの哲学者ヘムステルホイスについての研究ノートを遺している。こうした精力的な文学・哲学の研究は、ゾフィーの死とどのような関係にあるのだろうか。そのことを理解するための手掛かりは、ノヴァーリスが三月二九日に知人のユスト郡

長（Kreisamtmann Just）に宛てた書簡の記述に見て取ることができる（I 628）。その中で彼は、学問を、「より高次の立場から」、つまり「不可視の世界を見渡」すために研究していると述べている。この「不可視の世界」が彼岸の死の世界を指していることは明らかであろう。彼は学問によって日常生活の「騒音」から遠ざかろうとしているのであり、書簡におけるこうした記述に対応しているのが、哲学と自殺とを結びつけている以下の遺稿断片である。

> 真の哲学的な行為は自殺（Selbsttödtung）である。これはあらゆる哲学の本当の始まりであり、哲学修行者のいかなる欲求もそこへと向かう。そしてこの行為だけが超越論的行為の全ての条件とメルクマールに対応している。
>
> （II 223 xx）

この引用では、「自殺」が「真に哲学的な行為」として規定され、さらに「超越論的行為」と呼ばれている。この「超越論的」という言葉は一見分かりにくいが、この断片に続く箇所において、「優れたもの」は世界から「陶片追放」されねばならないという考察（II 223 xxi）[14]が展開されていることと関連づけると、意味が明瞭になる。そこでノヴァーリスは、「優れたもの」や「絶対的なもの」は、卑俗なものや相対的で有限なものの世界から自己を「陶片追放」して此岸的な世界から離脱すべきであると述べている。これを踏まえると、先の引用における「自殺」とは、卑俗で相対的な生から優れたもの、絶対的なものへと高まることであり、この相対的なものから絶対的なものへの高次化が「超越論的行為」であると理解できる。哲学を研究することによって「不可視の世界」あるいは「絶対的なもの」に接近することが、擬似的な死として理解されているのである。[15]

これに関連して注目すべきは、ノヴァーリスが自分の研究の成果を一つの著作として完結させることを非常に重視したということである。四月二八日の日記で彼は、

私はマイスターを完結させねばならない。私は完結させることを学ばねばならない――ひとつのことを片づけねばならない。

(I 459)

と書き、さらに九七年五月三日付のフリードリヒ・シュレーゲル宛て書簡でも、

僕は急がず、一つのことをゆっくり完結させようと思う。自分自身を完結させることを学ぶために。(I 636)

と述べている。四月二八日の日記で言及されている「マイスター」とは、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』のノヴァーリスによる批評であると考えられる。この批評が公刊されることは結局なかったが、ノヴァーリスはその批評を著作として完結させることを「自分自身を完結させること」の学習の手段として理解している。この表現は死の問題との関連で重要な意味を持っている。なぜならノヴァーリスは、「完結」という意味のドイツ語Vollendungを「死」という意味でも用いているからである。例えば彼はある書簡で「私のゾフィーの完結」(Vollendung meiner Sofie: I 620) という表現を、彼女の死という意味で用いている。前節で触れたように、ノヴァーリスは、死者であるゾフィーに同一化し死の世界について生者に告げ知らせるという、自己の「使徒の地位への使命」を、ゾフィーの「後を追って死ぬこと」と表現したが、彼はこの「後を追って死ぬこと」を実践する一形式として著作の完結を目指したと考えられる。つまりノヴァーリスにとっては、一つの著作を完結させることが哲学することと同様に擬似的な自殺を意味したと考えられる。

以上検討してきたように、哲学をはじめとする学問を研究すること、そして一つの著作を完結させることを、ノヴァーリスは擬似的・比喩的な自殺として理解していた。そしてこのことは、前節で触れた、ゾフィーのイメージをできる限り生き生きと想起しようとするノヴァーリスの努力と対をなしている。前者は、生者が学問という手段によって死者の「不可視の世界」へと接近しようとする試みであり、後者は、もはや現実に存在しない死

者を想像力によってあたかも現前するかのように表象し、死者の世界を生者の世界へと引き寄せようとする努力である。これらの営為によってノヴァーリスは、生者の属する日常性の世界に留まりながら、死者の世界と生者の世界を媒介しようとしたのである。

三　「ロマン化」と「対数化」から「諸器官の能動的使用」へ——生と死の境界の克服

ノヴァーリスの九七年の日記と書簡の分析によって、彼がゾフィーの死を契機として死者の世界と生者の世界の媒介を目指すようになったことが明らかになった。こうした彼の関心は、「ロマン化」と「対数化」の詩学とどう関係しているのか。

「ロマン化」と「対数化」についてノヴァーリスが最も明確に規定しているのは、一七九八年の「準備作業」(Vorarbeiten) と呼ばれる遺稿に含まれている以下の断片においてである。

> 世界はロマン化されねばならない (Die Welt muß romantisirt werden)。そうすることでひとは根源的な意味を再び見出す。ロマン化することは質的な累乗 (eine qualitative Potenzirung) に他ならない。低次の自己がこの操作ではよりよい自己と同一化される。我々自身がそのような質的な冪級数 (solche qualitative Potenzenreihe) であるのと同じように。この操作は未だ全く知られていない。私が平凡なものに高次の意味を与え、ありふれたものに謎めいた外見を与え、既知のものに未知のものの威厳を与え、有限なものに無限の仮象を与えれば、私はそうしたものをロマン化することになる——より高次のもの、未知のもの、神秘的なもの、無限なものについての操作は反対である——そうしたものはこの結合によって対数化される (logarythmisirt) ——そうしたものは人口に膾炙した表現を得る。ロマン的哲学。ロマンス言語。交互的な高次化と低次化 (Wechselerhöhung und Erniedrigung)。 (II 334 cv)

この断片によれば「ロマン化」と「対数化」は反対の方向性を持った操作である。「ロマン化」は、「平凡なもの」や「有限なもの」に「高次の意味」や「無限の仮象」を与える「質的累乗」の操作であるのに対して、「対数化」は、「神秘的なもの」や「無限のもの」に「人口に膾炙した」表現を与える操作である。この「ロマン化」と「対数化」は対立するというよりむしろ同じ事態の二つの側面として理解すべきである。そのことはノヴァーリスが「冪級数」に言及していることから理解される。冪級数とは、数列$\{a_n\}$と変数Xに対して、$a_0+a_1X+a_2X^2+\cdots a_nX^n\cdots$ の形の級数である。すると、この級数を左から右へnの値が大きくなる過程として見れば、それはノヴァーリスの言う「ロマン化」の操作に対応し、逆に右から左へ小さくなる過程として見れば、「対数化」の操作に対応する。本来二つの操作は「交互的な高次化と低次化」として一体を成しているのである。またノヴァーリスは「我々自身が」「質的な冪級数」であると述べているが、その意味するところは、人間とは低次の段階から次第に高まっていく複数の自己の集合体であるということである。

ノヴァーリスの日記や書簡に関する前節までの検討を踏まえてこの「ロマン化」についての断片を読むと、両者が密接に関連していることが明らかになるし、さらに本稿の冒頭で触れた、一七九九年頃の断片における「死は我々の生をロマン化する原理である」という表現の意味するところも明確になる。というのも、九七年四月から七月までの日記と書簡に記された、日常性への埋没から逃れて生者の世界と死者の世界を媒介しようとしたノヴァーリスの営為は、「ロマン化」と「対数化」の詩学と構造的に一致しており、いわば生と死の間の「交互的な高次化と低次化」として理解できるからである。一方で、想像力によってゾフィーの姿を想起し、死者である彼女を生者の世界に現前させようと努めたことは、不可視の死者を可視化しようとする「対数化」の試みとして理解できるし、他方、哲学をはじめとする学問を研究することによって、また一つの著作を完結させることによって、擬似的に自殺することは、「平凡な」生者の世界に死者の世界の「高次の意味」を与える「ロマン化」の試みであると理解できる。さらに、第一節で見たように、ノヴァーリスの内心におけるゾフィーのイメージが彼にとって「よりよい自己」として位置づけられていたことを思い出せば、「ロマン化」および「対数化」によって「低

次の自己」と「よりよい自己」が同一化されるというノヴァーリスの議論は、ノヴァーリスのゾフィーに対する関係と正確に合致する。

ノヴァーリスの死者ゾフィーへの関わりは、「ロマン化」と「対数化」の詩学と構造的に合致するだけではない。なぜなら、「ロマン化」と「対数化」についての断片と同時期に書かれた他の断片を参照すると、「ロマン化」および「対数化」の詩学はその動機という点からして、死者の世界と生者の世界との媒介を目指す九七年以来の彼の関心を理論化したものと解釈できるからである。

「ロマン化」と「対数化」から成る「交互的な高次化と低次化」という構想は、同じ時期のある断片では自然の領域と精神の領域との「自由な交替」という理想へと発展している。

> 奇跡の世界と自然の世界。
> 霊の国（Geisterreich）と現実の世界。
> これら二つの状態の自由な交替。恣意と偶然が一つに。奇跡と合法則的な作用。自然と精神＝神（II 337 cxii）

この断片でノヴァーリスは、精神と自然という対概念を「霊の国」と「現実の世界」の対立関係に対応させている。このことからは、精神（Geist）は現実世界にあって霊（Geister）の領域に通じるとノヴァーリスがみなしていることが分かるが、むろん彼は両者を同一視しているわけではない。ノヴァーリスは、自然の合法則性が支配する此岸の「現実の世界」と、そうした合法則性から解放された彼岸の「霊の国」とを対立させる一方で、「現実の世界」自体が、自然の合法則性と精神の恣意とが併存する二元的な世界であることも踏まえているのである。その上で彼は、「霊の国」と「現実の世界」の対立関係と自然と精神の対立関係の両方とも超える「自由な交替」を理想として提示している。[16] この理想の意味するところを具体的に説明しているのが、「諸器官の能動的使用」（der täthige Gebrauch der Organe）を主題とする断片である（II 372f. ccxlvii）。[17]

ノヴァーリスはこの断片でまず、人間は自分の「思考器官」(Denkorgan) を随意に運動させることができるし、運動を変更し、運動とその所産とを観察し、言語・身振り・行為によって表現することができると指摘する。そしてこの「思考器官」の能動的使用を発見しこれについて説いたのは哲学者フィヒテの功績であるとされる。ここでノヴァーリスは、人間は「思考器官」を随意に用いるだけでなく「身体の内的諸器官」を随意に「動かし、抑制し、統一し、分解すること」も「学ばねばならない」と述べる。つまり、人間の身体のうち普通は自由意志が及ばない部分をも人間は随意に制御できるようになるべきである、と彼は言うのである。ここで目指されているのは、精神が自由に作用できる領域と自然の必然性が支配する領域との断絶を解消することである。ノヴァーリスは「我々の全身体は精神によって意のままに動かされることが絶対に可能である」と断言する。

彼によれば、人間が全身体を随意に制御できるならば、視覚・聴覚・触覚といった感官も、外界から感覚与件を受け取るだけでなく感覚与件を恣意的に作り出せるはずである。

> 人間は、自分の感官を強いて、自分の欲する形態を産出させるだろう――そして本来の意味で自分の世界に生きることができるようになるだろう。[……] 彼は自分の欲するものを、欲するように、自分の欲する組み合わせで見たり聞いたり――そして触ったりすることだろう。 (II 373 ccxlvii)

別の断片によれば、感官を能動的に使用することは、すでに芸術家という一部の人間によって行われている。その断片では、芸術家は「現実世界の随意の変更のための道具として諸器官を使用できる状態にある」(II 363 ccvi) と言われている。[18] つまり、感官という一部の器官について、それを普通の人間よりも能動的に使用できるのが芸術家であると彼は理解しているのである。第二節との関連で言えば、芸術家が感官を利用して現実世界を随意に変更することは、ノヴァーリスが想像力の能動的な作用によってゾフィーの姿を想起し、彼女を現実世界に現前させようとしたことと明らかに密接に関連している。本稿では既に、想起によるゾフィーの現前化は、不可視の

死者を可視化しようとするという意味で「対数化」であると述べたが、芸術家の創造行為も、「思考器官」において人間が保持している運動の自由を感官において実現するという点で、高次の自己から低次の自己への「対数化」であると言える。さらに言えば、感官が「思考器官」のように能動的に使用可能になることによって、精神が自由に作用できる領域と自然の必然性が支配する領域との断絶が乗り越えられたときにはじめて、「ロマン化」と「対数化」の「交互的な高次化と低次化」が可能になる。このことを哲学と芸術との関係として定式化するならば、「思考器官」を能動的に使用する哲学だけでは、自然の領域から精神の領域へと高まることはできても、両者の間を自由に往還することはできないのであって、感官を能動的に使用する芸術創造が哲学と結合してはじめて、自然と精神の間の「交互的な高次化と低次化」が可能になるのである。

しかしノヴァーリスの言う「諸器官の能動的使用」は、芸術創造における感官の能動的使用に限定されない。彼は、精神によって全身体を意のままに運動させるという構想の行き着く先として、「誰もが自分自身の医師である」という事態を想像する。

> [精神によって全身体を意のままに運動させることができるならば] 誰もが自分自身の医師であるだろう——そして自分の身体の完全で確実で正確な感情を得ることができるだろう——そうしてはじめて人間は真に自然から独立し、それどころかおそらくは失われた四肢を再建したり、自分の意志だけによって自殺することができるようになるだろう。そしてそれによってはじめて身体—魂—世界、生—死そして霊の世界についての真の知を獲得することができるだろう。
>
> (II 372f. ccxlvii)

感官の能動的使用が感覚与件の創造に留まるのに対し、この引用でノヴァーリスは、身体そのものの一部を随意に生成させること、また精神と身体を随意に切り離して自分の意志だけで（物理的に何らの働きかけもすることなく）実際に自殺することを、全身体の能動的使用として構想している[19]。もし身体と精神が意志の力だけで自由

に分離できるならば、再び結合することも随意にできるだろうから、全身体を能動的に使用する人間は、意志の力だけで何度も自殺しまた復活できるはずである。つまりそのような人間には、精神と自然との「自由な交替」が可能であるだけでなく、彼岸の「霊の世界」と此岸の「現実の世界」との「自由な交替」もまた可能なのである。ノヴァーリスにとって芸術家の芸術家たるゆえんが感官の能動的な使用にあることを踏まえると、感官のみならず全身体を能動的に使用して生と死を自由に往還する人間は、現実の芸術家を超越したところに展望されるいわば究極の芸術家であると言えよう。

結論

ノヴァーリスの「ロマン化」と「対数化」の詩学は、「平凡なもの」と「神秘的なもの」、「有限なもの」と「無限なもの」を媒介する「交互的な高次化と低次化」を目指したが、この詩学は自然と精神の「自由な交替」という理想へと発展した。その具体的内実は、「思考器官」である精神だけでなく身体をも人間が自由に操作するという「諸器官の能動的使用」であった。ノヴァーリスによれば、感官の能動的使用は既に芸術家が実践しているが、全身体を能動的に使用することの究極的な帰結は、随意に身体と精神を結合・分離することであり、それは生と死を自由に往還することを含意していた。

「ロマン化」と「対数化」の詩学は、一七九七年の日記と書簡に記録された死者ゾフィーと生者ノヴァーリスの関わりと構造的に一致するだけではない。一七九七年以来彼が持っていた、此岸と彼岸、生と死の境界を乗り越えることへの関心こそが、彼にこの詩学を構想させたのである。本稿冒頭で挙げた、芸術創造と死の関係という問題に即して言えば、ノヴァーリスにとって芸術創造は、死者の追悼や追憶にとどまらず、死者の世界と生者の世界の断絶を克服するというより積極的な意義を持っており、ノヴァーリスは、芸術創造において実現されている感官の能動的使用を全身体の能動的使用にまで拡張したとき、人間は文字通り生と死を随意に行き来できるという展望を持っていたのである。

注

（1）「ノヴァーリス」という筆名については、中井章子『ノヴァーリスと自然神秘思想』（創文社　一九九八年）註三四頁を参照せよ。

（2）例えば、「ＤＡＬＳニューズレター」第一号（二〇〇三年）における第二部会「生と死の形象と死生観」の紹介（小佐野重利）では、死の形象に関する近年の研究の事例と今後の研究の展望が示されている。

（3）断片の全体は以下の通り。

死は我々の生をロマン化する原理である。死は－であり、生は＋である。死によって生は強化される。

ノヴァーリスのテクストは、歴史的批判的全集に依拠した以下の普及版著作集から引用する。Novalis. Werke, Tagebücher und Briefe Friedrich von Hardenbergs. Hrsg. von Hans-Joachim Mähl und Richard Samuel. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft) 1999. 3Bde.
大文字ローマ数字によって巻数を示し、算用数字で頁数を示す。また遺稿断片についてはさらに小文字ローマ数字でその番号を示す。引用者による補足は［　］で示し、ノヴァーリスによる強調は訳文において傍点で示す。
以下の邦訳を参照した。
由良君美（編集・構成）『ノヴァーリス全集』牧神社　一九七六―七八年

（4）「対数計算する」と言う意味の現代ドイツ語はlogarithmierenだが、ノヴァーリスは「ロマン化」と「対数化」についての一七九八年の断片（II 334 cx）で、「対数化する」という意味の動詞の過去分詞として、logarythmisirtという表記を用いている。

（5）本稿では「詩学」という言葉を、文学に限定されない芸術創作論一般を指して用いる。

中井は、詩学よりも広い文脈の中でノヴァーリスの「ロマン化」を理解している。彼女は彼の宗教的歴史哲学を踏まえて、ノヴァーリスにおける「ロマン化」を、人間の「創造的想像力」による「黄金時代」の実現の課題として解釈している。また、ノヴァーリスの政治的断章集『信仰と愛』が「ロマン化」の実践であることを指摘した研究として、小田部胤久「政治的汎神論の詩学――ノヴァーリス『信仰と愛あるいは王と王妃』をめぐって」（『美学』第二一六号 美学会編 二〇〇四年 一四―二七頁）がある。

（6）ノヴァーリスの一七九八年の自然科学研究における性・病気・死の問題を扱った論考として以下のものがあるが、ノヴァーリスの日記・書簡における死の問題には言及していない。Krell, David Farrell: Contagion. Sexuality, disease, and death in German idealism and romanticism. Bloomington & Indianapolis (Indiana University Press) 1998, pp. 29-69.

（7）この日記については中井『ノヴァーリスと自然神秘思想』の第一章で比較的詳細に論じられている（二三―二九頁）。それによると、この日記を書いていた時期のノヴァーリスは現実に自殺を決心していたが、その後精神的危機を乗り越えて、自己の「『内なる』『精神の深み』」を発見するという過程をたどったとされる。しかし、本稿の後の箇所で検討するように、日記において「決心」ないし「目標」と呼ばれているものが、一義的に本当の自殺を意味するとは思われない。

（8）この日の記述は以下の通りである。

四月一八日　三一

早朝に性的な興奮。彼女と自分についてさまざまな考え。哲学は非常に快活で軽やか。目標についての考えは非常に確実だった――弱さの感情――しかし拡張と前進。モーリッツ。ともに食事し、その後陽気におしゃべりする。ユストが「おお歌え」の歌を演奏する。そしてツィターの演奏。『ヴィルヘルム・マイスター［の修業時代］』の第四巻のある適切な箇所――マイスターの独白――が目に留まる。その後上の階に上がって回想録に書き込む。思索と仕事に対してあまり意欲的ではなかった。午後はずっと気乗りがしなかったようだ――おそらく社交も私を妨げるのだろう。何であれ私が行う社交は私にふさわしくない。

（I 456f.）

（9）メイハニーは、この書簡においてノヴァーリスが過去のフィヒテ研究を踏まえて論理展開しているというディック

の説（Dick, Manfred: Die Entwicklung des Gedankens der Poesie in den Fragmenten des Novalis. Bonn (Bouvier) 1967, S. 174f.）を支持し、九七年上半期の日記と書簡は、「言語的手段によってゾフィーの死からある意味を獲得しようとハルデンベルクがいかに試みたか」を示しているがゆえに、「言語による創造の記録」（sprachschöpferische Dokumente）であると述べる。Mahoney, Dennis F.: Friedrich von Hardenberg (Novalis). Stuttgart (Metzler) 2001, S. 47.

（10）例えば三月二四日付のカロリーネ・ユスト宛書簡でも、「感覚の鈍感さ」（Nervenstumpfheit）、「日常性」（Gewöhnlichkeit）、「甘やかされていること」（Verwöhntseyn）へのノヴァーリスの反省が示されている（I 625）。

（11）中井『ノヴァーリスと自然神秘思想』一二三頁。中井はさらに、ノヴァーリスの思想にとって「実験」が、「自然科学の『実験』と敬虔主義の『実験』の両方の要素を合わせもつ」ことを指摘している。中井によれば、そのような「実験」とは、「感覚的なものであると同時に、魂のなかのものであ」るがゆえに、「想像力による『ポエティッシュな実験』」、すなわち芸術的な創造行為に他ならない（一二三―一二四頁）。

（12）たとえば日記には、「横顔の」彼女を想起したという具体的な説明が書かれている。

（13）五月一三日の日記において「ゾフィー体験」は以下のように記述されている。

夕方ゾフィーの所へゆく。そこで私は言い表し得ないほど喜ばしかった――突然の熱狂の瞬間――私は眼前で墓を塵のように吹き飛ばした――数世紀が瞬間のようだった――彼女の近さが感じられた――彼女は常に立ち現れるはずだと私は信じた。（I 463）

「夜の讃歌」においてこれに対応しているのは、第三連の以下の箇所である。

塚は土煙になった――土煙を通して私は愛する人の変容した顔立ちを見た。彼女の目には永遠が安らいでいた――私は彼女の手を取り、涙は裂くことのできない輝く絆となった。数千年が雷雨のように遠くへ流れ下った。私は彼女の傍で新しい生のために恍惚の涙を流した――これが最初で唯一の夢であった――そして私はそれ以来はじめて、夜空への、そしてその光である愛する人への永久不変の信仰を感じるようになった。（I 155）

(14) 「陶片追放」とは、古代ギリシア民主制において僭主の出現を防ぐために行われた市民による投票制度であり、陶片による投票の結果危険人物とされた者は一〇年間国外追放された。

(15) マンフレート・フランクはこの断片をノヴァーリスのフィヒテ研究と関連づけ、「自殺」を反省の自己否定と解している。Frank, Manfred: Ordo inversus. Zu einer Reflexionsfigur bei Novalis, Hölderlin, Kleist und Kafka. In: Geist und Zeichen. Festschrift für Arthur Henkel. Heidelberg (Carl Winter Wissenschaftsverlag) 1977, S. 80.

(16) ノヴァーリスが霊と精神を区別しつつも類比的に捉えていることは、彼が一七九八年に雑誌『アテネーウム』で公にした断片集「花粉」(Blütenstaub) の第四五番からも分かる。

> 自己の内に還帰することは、我々においては、外的世界を捨象することを意味する。霊 (Geister) においてはこれと類比的に、現世の生が、内的な観察、自己の内に入っていくこと、内在的に作用することを意味する。だから現世の生は、我々の反省と同じように自由な、ある原初的な反省、原始的な内向、自己自身への集中から生じる。これと反対に、この世界における精神的な生 (das geistige Leben) は、その原始的な反省を突破することから生じる。精神 (der Geist) は再び展開し、再び自己自身から外に出て、部分的にはその反省を再び廃棄するのであり、この瞬間に精神は初めて「我 (Ich)」と言う。このことから、外向と内向とがいかに相対的であるかが分かる。我々が内向と呼ぶものは、本来外向であり、最初の形態を再び取ることである。 (II 245)

つまり、霊の原初的な反省から現世の生が生じ、現世の生においてさらに自己内還帰がなされると（原初的な反省が部分的に廃棄され）精神的な生が生じるとされている。この断片についてはさらに中井『ノヴァーリスと自然神秘思想』四五頁を参照。

(17) 自然の領域と精神の領域の「自由な交替」に言及した断片 (II 336f. cxii) の冒頭では、「ほしいままに感覚印象を作り出す能力、技能」について論じられており、この断片が「諸器官の能動的使用」についての断片 (II 372f. ccxlvii) と密接な関係を持っていると分かる。

「諸器官の能動的使用」について、特にフィヒテとの関連に重点を置いて論じた研究として、井戸慶治「ノヴァーリスにおける『器官の能動的使用』について」(『シェリング年報』第六号　日本シェリング協会編　一九九八年　七

五―八四頁）を参照。

（18）「画家は本来目によって描く――彼の芸術は規則的に、そして美しく見る術である。見ることはここでは全く能動的（activ）である――全くもって造形する活動である。［……］音楽家もまた本来能動的に聞く――彼は外へ出して聞く（heraushören）のである。［……］芸術家は、自己形成する生の萌芽を自分の諸器官において活気づけたのである――精神に対するそれらの器官の刺激されやすさ（Reitzbarkeit）を高めたのであり、したがって観念を意のままに――外からの刺激（äußre Sollicitation）がなくとも――諸器官を通じて外へと流出させられる状態にある。」（II 363 ccvi）

（19）ノヴァーリスは、「人間は――それがよいと思えば――自分の身体から自己を切り離すことができるようになろう」（II 373 ccxlvii）とも述べている。

（たなか・ひとし　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程）

'Death is the Romanticising Principle of Our Life'*: Novalis' Diary and Letters in 1797 and His Poetics of 'Romanticising'

Hitoshi Tanaka

In this paper, I analyse the diary, letters and theoretical fragments of Novalis (autonym: Friedrich von Hardenberg, 1772–1801), in order to clarify the relationship between death and artistic creation in his thought.

In his diary and letters from March to July 1797, Novalis wrote down his confrontation with the death of his fiancée, Sophie von Kühn. He often referred to his 'decision', which is usually interpreted as his resolution to commit suicide. However, by the expression 'follow her in death' (nachsterben) he referred to his 'apostolic' mission to believe in her transfiguration into an eternal being and to identify himself with her in his inner life. For this purpose, he endeavoured, on the one hand, to recollect her as vividly as possible, and, on the other, he studied philosophy, literature and other sciences intensively in order to come close to the realm of invisibility. Moreover, he aimed to complete his studies as a work that would put an end to his own life metaphorically.

When compared with the diary and letters written in 1797, the significance of a theoretical fragment written in 1799, in which he termed death as 'the Romanticising principle of our life' becomes clear. 'Romanticising' (Romantisierung) in Novalis' poetics signifies an operation that gives the ordinary a mystic appearance, while the operation in the opposite direction is termed a 'logarithmic change' (Logarithmisierung), which combines the mystic with an exoteric expression. As a consequence of the theory of these poetic operations, he conceived the idea of 'active use of organs'. It includes not only artistic creation as the active use of senses but also the use of the whole body, which should enable everyone to reconstruct his/her limbs arbitrarily and furthermore to kill and revive himself/herself alternately only by will.

My conclusion is that the theory of 'romanticising' and 'logarithmic change', which should unify the lower and the higher self, were based on his interest since 1797 to surmount the border between the realms of the dead and the

living.

* Novalis: Philosophical Writings. Tr. & ed. by Margaret Mahony Stoljar. Albany (State University of New York Press) 1997, p. 154.